

142. 多摩川のアユ

技術戦略部次長 三宮 武

先日、NHKの番組（「ダーウィンが来た 生きもの新伝説」）の中で、「多摩川」を扱っていました。ご覧になった方も多いのではないかと思います。

近年、多い年には、約1,000万匹のアユが多摩川を遡るとのことです。私の中では、多摩川に生息する魚と言えば、コイやフナを連想していましたが、これほど多くのアユが生息しているとは、驚きでした。何しろ、小学生の頃、多摩川という川を初めて知った時に得たイメージは、“洗剤の泡だらけの川”でした。（調布取水所防潮堰直下流で泡立っていたイメージです。）その多摩川が約40年を経た今日、水質等の河川環境が大きく改善されて、“清流の女王アユ”の川になっていたわけです。

番組の中でも、下水道整備の効果が紹介されていました。下水道の整備によって、生活排水が直接河川に流入することは、ほぼ無くなりました。一方その結果として、多摩川の河川水に占める下水処理水の割合は、下流域では、6割くらいになりました。番組では、「下水処理場では、生活排水中の窒素とリンまでは完全に取りきれないので、処理水中にはそれらが（多く）含まれる。それら栄養塩の影響で、アユの餌になる藻が豊富に繁茂していることが、これほど多くのアユが生息している大きな要因の一つである。」という説明がなされていました。何となくこの説明は、“不幸中の幸い”、“怪我の功名”とも言いたいようなニュアンスがあります。良くも悪くも下水道の影響が非常に大きい河川になっていることは確かですが、こうした中で、『下水道で意図してコントロールしていた』という説明ができるようになれば、下水道に携わる者としては、素晴らしいと思いますが、いかがでしょうか…。

もちろん、下水道だけの力ではなく、アユが遡るための魚道の整備など、他にも重要な要素はありました。アユが遡れるように、堰を改築して魚道を作ることや、中には、アユが遡上する季節に人力で土嚢を積み上げ、アユが堰を越えられるようにすることなどの“人の手”もかなり入っているようです。実は、“自然”と思われている（思われてきた）ことも、人間の手を借りて、保たれているような場合が多々あります。これまた、NHKの番組で見たのですが、明治神宮の森は、もとは荒地であったところに計画的に植樹をして、さらに落ち葉の管理など、人為的な手も加えて、今日まで保たれているとのことです。

人が密集して暮らす故に必要となる下水道は、これまでは、国内のすべての場所で、「悪化した環境を少しでも良くしよう、水質を良くしよう」という意図で整備されてきました。しかし最近では、そこから少し考え方を“進化”させ、季節別に下水処理場の運転方法を変えて、放流水中の栄養塩の濃度を意図的に上下させることで、水産資源の増加に寄与する取り組みなども始められています。流総計画においても、放流水質の濃度を下げるための一方向だけの計画ではなく、時間、空間、エネルギー使用量も考慮した“四次元流総”が打ち出されています。

多様化する価値観の中にあっても、多くの人が好ましく思う価値。下水道がこれまで以上にそれらの創出に貢献できるように、また、それに携わる一員として、引き続き力を尽くしていきたいと思います。